第１章

行動・体験型教室活動！？

「使える」日本語とは？

● 何のために日本語を学ぶのだろう？

今、愛知県には20万3, 698人の外国人が暮らしています（2015年6月末現在）。最近は、日本に帰化する外国人も増えているので、「外国につながる住民」はそれ以上の数の方がいると考えられます。国籍も年齢も来日目的も日本での状況も様々な外国人住民が年々増えているのです。そして、そうした方たちが、現在、愛知県内に100以上あるボランティアによる日本語教室で日本語を学んでいます。

では、その方たちは何のために日本語を学んでいるのでしょう? 日本語を学ぶ目的も様々ですが、少なくとも「知識・教養」のためだけに学んでいるわけではないでしょう。文化庁のことばを借りるなら、

「言語・文化の相互尊重を前提としながら、日本語で意思疎通を図り生活できるようになること」

が目的であり、

- ○ **日本語を使って、健康かつ安全に生活を送ることができるようにすること**
- ○ **日本語を使って、自立した生活を送ることができるようにすること**
- ○ **日本語を使って、相互理解を図り、社会の一員として生活を送ることができるようにすること**
- ○ **日本語を使って、文化的な生活を送ることができるようにすること**

が目標なのです。

もしかしたら、「いやいや、学習者から『日本語能力試験1級に合格したいから来ている』と言われている」とおっしゃるボランティアもいるかもしれません。確かに、試験勉強以外はしたくないという学習者もたくさんいます。でも、何のために日本語能力試験1級に合格したいのでしょう? いい仕事につくため。では、何のためにいい仕事につきたいのでしょう?…と考えていくと、本人が明確に認識しているかどうかは別として、安心して自分らしい暮らしをしたいから、そのためには日本語を学んだほうがいいから、仕事が終わった後、あるいは休みの日に日本語教室に通っているのではないでしょうか。

「多文化共生のための日本語教室」というと抵抗を感じるボランティアも多いかもしれませんが、国籍を問わずすべての人が安心して暮らせる社会が「多文化共生社会」であるとすると、やはり、地域の日本語教室は、学習者が安心して暮らせることを目指す多文化共生社会の実現を目指した活動なのです。

●「使えなければ」意味がない！

とはいえ、生活上のどんな場面で日本語を使えることが目標につながるのかは、学習者によってそれぞれです。どんな方法でどんな内容を提供したとしても、それが学習者の「安心で自分らしい生活」につながっているのであれば問題ありません。でも少なくとも、日本語教室以外のいろいろな場面で、学んだ日本語を使うことができないとしたら、目的を達成しているとはいえないでしょう。

普段の日本語教室活動の中で、「使える」日本語を意識しているでしょうか?

学んだ日本語を学習者が生活の中で使えているかどうか確認しているでしょうか?

学習者と一緒に目標を立てよう。

多くの地域日本語教室は、週に1回、90～120分ぐらいでクラスを行っているのではないでしょうか。それ以外の時間、学習者は仕事をしていたり、子育てをしていたりで忙しく、なかなか日本語の勉強に時間を費やすことができません。そうした中で、効率的に勉強し、自分自身がスキルアップや達成感を感じることができ、モチベーションを維持するために、学習者と一緒に「〇〇できるようになる」という目標をたてましょう。

目標を考えるためのやり取りもコミュニケーションの練習になりますし、目標をたてることによって、日常生活の中で意識的に日本語を聞いたり、使ったりできるようになります。学習者と一緒に考えるのでニーズにも合致しますし、今、何のためにこのことばを学んでいるのか明確になって、「できること」が一つずつ増えていけば、日本語学習が楽しくなるでしょう。

地域の方との協働が大切。その時は、活動の趣旨をきちんと伝えよう。

「行動・体験型教室活動」の目的は、学習者が過ごしている普段の日常生活の中で使われている日本語を理解し、使えるようにすることです。そのためには、教室のボランティアだけでなく、地域のいろいろな方たちとのコミュニケーションを図ることが大切です。その時、相手が外国人だからといって、必要以上にゆっくり簡単な日本語を話されても意味がありませんし、あまりにも専門的な難しい話をされても学習者は嫌になってしまいます。

地域の方たちと協働するとき大切なのは、あらかじめ、プログラムの目的や趣旨をきちんと理解していただいた上で、学習者の人数や日本語レベル、目標、プログラム全体の流れなどもお伝えしておくことでしょう。

資料や映像、テーマに関連した書類等、どんなものがあるのかについても打合せをしておいた方がいいと思います。

行動・体験した後のふりかえり（確認）が重要。そこで日本語が定着する。

「行動・体験型教室活動」はあくまで日本語学習です。行動・体験することや情報を得ることが第1の目的ではありません。

したがって、行動・体験した後のふりかえり（確認）の時間がとても重要です。写真やビデオを撮ったり、出てきた日本語を記録したりしておき、行動・体験しているときにどんなことが起こったか、どんな日本語が使われていたか、後で思い出せるようにしておくとよいでしょう。

また、ふりかえり（確認）のときは、できるだけ、学習者が発言する機会を増やしましょう。

よくある疑問にお答えします

毎期、最後の授業でいろんなところに見学に行ってます。すでに行動・体験型やってるし。何で今さら？

「行動・体験型教室活動」は単に、何かを体験したり、どこかに行ったり見学したりすることをしようとしているわけではありません。

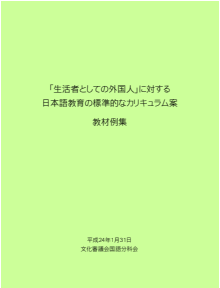
まずは、何を行動し、何を体験するか、理想的なのはそこから学習者と一緒に考えることです。日本語がわからないがためにできなかったことをできるようにしたいわけですから、「どんなことができなくて困っているのか」「どんなことをできるようになりたいのか」を踏まえてテーマを決めることが大切です。「あたたかくなったから、お城でも見に行こうか」「今学期も最後だし、みんなで美味しい日本料理食べに行こうか」…とは違うのです。

そして、もう一つ大切なことは、行動や体験の中で出てきた日本語をきちんとふりかえって学ぶことです。行動や体験をして「楽しかったね」で終わってしまっては意味がありません。「あの時、お店の人はこんなことを言っていたけれど、あれってどういう意味?」とか「こういうことを伝えたかったんだけれど、ちゃんと伝わってた?」「あのとき、もしこうしたかったら、どう言えばいいの?」などのふりかえりを学習者と一緒に行うことが実は一番重要なのです。

準備も大変だし、毎回体験型にするのはちょっと…。

もちろん、毎回何かを体験する必要はありません。テキストによる学習などとうまく組み合わせて、目的を踏まえた楽しい教室活動を展開するのもいいと思います。大切なのは、日本で生活する上で何かができるようになるための日本語を学ぶということなのです。

また、名称から誤解されてしまいがちですが、「行動・体験型」は必ずしも、どこかへ行ったり、何かを体験しなければいけない活動ではありません。教室活動の中で「ロールプレイ」をされることもあると思いますが、その内容を架空のものではなく、実生活に即したものにすれば、それも「行動・体験型」になります。できれば、普段接しているボランティア以外の地域の方が加わるとより効果的な活動ができますが、その他、新聞に挟み込まれているチラシだったり、町内会で配られる「お知らせ」など普段の生活の中のものを活用することもできますし、文化庁作成の『「生活者としての外国人」に対する日本語教育の標準的なカリキュラム案　教材例集』も便利です。要は、「This is a pen.」のような日本語ではなく、日本人が普段使う日本語を学びましょう…ということなのです。



上級者ならいいけれど初級者には無理なんじゃないの？

そんなことはありません。初級者も日本で生活しているわけですから、むしろ初級者こそたくさんのテーマを選ぶことができるのではないでしょうか? もしかしたら、明日、大災害が起こってしまうかもしれません。

行動・体験をするときは、初級者も上級者も一緒に活動できます。ただ、行動・体験したあとのふりかえり(「確認」の時間)は、レベルごとに分かれた方がいいかもしれません。

これまでのやり方もあるし、「行動・体験型」を採り入れることについて教室の合意をとるのは難しいなぁ

もう一度考えてみましょう。何のための日本語教室でしょうか? これまでのやり方に固執したり、ボランティアの考え方だけで活動してしまっていいのでしょうか? 学習者にとって一番いいことは何なのかを考える必要は? また、教室の中で、ボランティア同士コミュニケーションはとれているでしょうか?

ボランティアの強みのひとつは「多様性」です。いろいろな考え方、いろいろなスキル、いろいろな知識や経験が集まっていることで、一人ではできないことができる…それがボランティアの力! 時間ぎりぎりに集まって挨拶はするけれど、そのままバラバラのグループで学習者と話し、終わったら挨拶して帰る。他のボランティアがどんな教材を使ってどんな風に教えているのかよくわからない。ボランティアなので仕方がない部分もありますが、いつもいつもそんな感じ…というのはもったいないと思います。

「行動・体験型」が絶対いい! というわけではありません。教室によっては、別のやり方の方が学習者の目的を達成できるかもしれません。これを機会に教室にとって、そして何よりも学習者にとってどんなやり方がいいか、いろいろ話してみてはどうでしょう?

❤ もっと理解を深めるために ❤

2015年2月当協会が作成した『「使える」日本語を学ぶ!～行動・体験型の教室活動をつくろう～』では、「標準的なカリキュラム案」や活動をつくるプロセスなどについて詳しく説明しています。あわせてご活用ください。